

## 単独と神秘と

### ―野村実先生の信仰

まえおき

私が野村実先生に初めてお目にかかったのは一九五二年ですから、先生とのお付き合いはずい分長かったことになりましたが、私は先生の患者でもなく、また八六年に入会した「シュワイツァー日本友の会」も、申しわけないことですが名前だけの会員です。そういうわけで、私は決して個人的に先生をよく存じあげていたわけではありませんので、先生をよくご存知の方々の前で先生についてお話しすることにはじくじたるものを覚えます。ただ先生は御著書が上梓される度に、御親切に私にまでご恵与下さいましたし、先生の思想的遍歴を示す大切なご講演もいくつか拝聴する機会に恵まれました。また八八年からは第五日曜日に先生のお宅で持たれたキリスト教集会に寄せてもいただきました。

そこでまよよりは主として『野村実著作集・上巻』（九四年六月刊）に依って、先生の信仰ないし信仰観と思われるものを、私なりに少々申しあげてみたいと思います。私の拙い話に、先生が少し首をかしげて頰杖をつく、あの独特なポーズで「そうですかねー」と言われるのではないかと思うと、甚だ緊張いたします。お聞き苦しい点、話がキリスト教に片寄る点、何とぞお許し願います。

#### 「人間味」の信仰と二人の師

これは七一年の降誕節に私どもの小さな集まりで、「生くるは主のため」と題してお話して下さった折のことですが、内村鑑三の文章を引用して、内村がヒューマニティという英語を「人間味」と訳し、「人間味」に欠けている者が、宗教的に偉大になるはずがない」と言っていると紹介して、「内村先生は特別な見方をなさる先生ですね、ほかの人にはちよつと言えないことです」と感に堪えないようにいわれたことを思い出します。その先生は、ご自分の最初の著書を『人間・シュヴァイツェル』（五五年）と題されたのです。

先生は確かに生涯キリスト教徒として生きられました。しかしその信仰は決して教義的な堅苦しい、いわゆる「立派な信仰」ではありませんでした。ご自分の信仰を語って、先生は「信仰というものは、ヒルティがいったように、稲妻のように瞬間的なものである、ということをご大事にしたい。今信じたことが、もう次の瞬間には信じていないということだつてあるだろうと思うのですね」と言っておられます。実に謙虚で、実存的な、それこそ人間味にあふれた信仰ではありませんか。

この先生の信仰についてお話するに当たっては、まず先生に二人の師があつたことを申さねばなりません。言うまでもなく内村鑑三とアルベルト・シュワイツァーです。先生は「私の信仰遍歴書」（七九年）という一篇の中で、この二人についていろいろと語った結びに、「内村先生からは信仰を導かれ、シュワイツァーは行動を通して私を教えてくれました。よい先生に恵まれました」と言っておられます。

内村もシュワイツァーも極めて堅固な自らの世界を持っている人物です。この偉人たちの二つの世界はそれぞれ全く異質のもので、当然のことながら、その二人を師として生きることが決して容易なことではありません。この点で、先生を最もよく知る人のひとりである野上寛次さんは、『著作集上巻』末尾に掲載された評論「野村実先生の歩み・信仰・人間」の中で、「先生は内村とシュワイツァーの間であつて、その時々

の状況によってユレていたといえます」と評しています。鋭い観察です。しかし私は先生にこのユレがあったがゆえに、先生ご自身の世界はかえって一層に広く豊かで、柔軟かつ強靱な精神が生むある深みをもつに至ったのではないかと考えるものです。

先生は甚だ慎み深い方で、ご自身のこととはめつたに語られず、わずかにこの二人の師をして自らを語らしめるという風でした。そのように語られた先生の信仰を、以下「単独」と「神秘」という二つの言葉を手がかりにお話してみようと思います。

## 単独

先生はデンマークの哲学者ゼーレン・キルケゴールがお好きでした。沖縄講演の一つ「絶望」（七六年、この表題も彼から借用したのですが）の中で、先生は「自分は」クリスチャンではないといい（つつ）、クリスチャンでありたいと願いながら死んだ哲学者」に深い同情を寄せるとともに、「自分はただのひとりになって神の前にゆかなければ、本当に神様には近付けないのだ」と信じたキルケゴールの「単独者」の主張に強い共感を示しておられます。

野村先生はシュワイツァー追悼講演「ひとりで歩いたシュワイツァー」（六五年）の中で、シュワイツァーの子供時代のあの有名な「パチンコ事件」や、アフリカ行きを決意したときの周囲の激しい反対などの例を挙げて、彼は「最後の最後までひとりで歩く孤独の人であった」、そして「博士は『キリストに在る秘義』をもって孤独に堪えた」と言っておられます。その講演の結びで「私たちは小さな平凡人であるが、博士をしてひ

とり歩かせないように努力したい」と言われた野村先生もまた、「最後の最後までひとりで歩く孤独の人」であられたのではないのでしょうか。

単独者としての悲壮なまでの孤独、それは神に知られた者のみに許された恩恵でありましようが、先生にも正にそれがありました。個人的なことを申して恐縮ですが、私が長いこと先生に「近づき難い」思い、むしろ一種の畏れを抱いていたのはそのゆえであった、と今にして気付くのです。これもまた先生が他をして自らを語らしめた例ですが（この場合は友人の山本泰次郎）、こうも言っておられます。「孤独や誤解を恐れて人間阿ができれば。それは淋しいことであるが致しかたない。」「外柔内烈」（野上さんの評）の先生の剛直な人格と、闊達なユーモアとが目に見えるようではありませんか。

目に見えるようと申せば、孤独を知る先生の孤独を描く筆は実に美しくありました。ほんの二ヶ所ご紹介いたします。

私は名もない一老婆の死に立ちあつた偉大な平凡人の姿を見たのであつた。赤道アフリカのらい村の一老婆の死は、平凡中の平凡事で、一匹の蟻の死と変わらないかも知れない。そこに立ったその日の博士は、決して、神学者として哲学者として参列したのではない。博士には、一老婆の死も、恐らくは一国の王の死も同じであつたろう。彼は、寸時を惜しむ多忙の中から、「ただ一人の人間」として、一対一で老婆の死を見送つたのである。（人間シュヴァイツェル）

文字通り、朝五時におきて、看護婦さんと一緒に患者さんの洗面から配膳、清掃一切をやりました。医者は私一人だから、入院患者の治療専門で、外来は受け付けなかった。朝からねるまで患者さんと生活していること、それが本当の医療だと信じきっていたんですよ。（日本一小さな結核病院の一日）

先生には珍しいほほえましいような文章で、単独者の幸福がいきいきと綴られています。

最後に、この単独の淵源を指し示す一文を引いて、この項を終わります。「イエスの前でする決心は、ひとりだけであるものです。共同ではできません。そこにイエスに従う者の独立性と孤独性が生まれます。それはイエスだけに従う者の必然の運命です。内村先生も、シュワイツァーも独立独行の人でした。」内村先生とシュワイツァー)

## 神 秘

もう一つ先生の信仰を彩る重要な要素は「神秘」でありましょう。

先生は内村五十周年記念講演会で「内村先生と神秘主義」（九〇年）という講演をしておられます。ここでは先生はキリスト教（思想）界における神秘主義の位置を語る述べて、とくに「無教会」におけるその認識不足を嘆き、内村は確かに「信仰は神秘主義ではない」と言ったが、実は内村のなかこそ神秘主義が息づいていたとして、その事実を内村の言葉を引いて詳述しておられます。「内村先生の信仰の核心である贖罪、復活、再臨、すべてこれ神秘の霊に貫かれた非合理の世界ではありませんか。『われキリストとともに十字架につけられたり。われもはや生くるに非ず、キリストわれにありて生くるなり』といったパウロのこころ、『彼は我なり、我は彼なり』という内村先生の胸中を誰が言葉を尽くして説きうると考えるでしょうか」と。

先生の理解によれば、「神の前に独り黙して座し、生ける神を仰ぎ、孤立無援の自己が神から打ちのめされる、その神秘的体験のなかで人はおのれの罪深さを自覚するのです。その間の消息は文字が伝え言葉が語りえない神秘そのものです」というのが神秘主義です。これはシュワイツァーがそれによって孤独に堪えたという「キリストに在る秘義」と同じでありましょう。さらにこの秘義は彼の言う「人と人との関係には、わたしたちがふつうに考えている以上に大きな神秘がある」（生い立ちの記）という、その神秘に通じます。神秘を貴重とされる野村先生は、極めて実践的な「こころの医者」であられました。こころをいやす」（七七年）という一篇の冒頭にシュワイツァーを引いて、この「こころの神秘」を諄々と説いておられます。

ここで先にも引いた野上さんの次の文章をご紹介します。「先生のもっともよきものは先生の『祈り』にあります。低く小さなささやきにも似た先生の祈りを聞くとき、ここに真に活ける神に祈る人間がいることを知りました。先生の言う『神秘主義』『実存的信仰』の実質はここにあるのではないのでしょうか。」先生の神秘主義の本質をよく言い当てていると思います。

ところで、野村先生は「内村先生とシュワイツァー」という講演を二回しておられます。その第一回は内村生誕百年記念講演の一つで（六一年）、この話の中で先生はこの二人に「その共通点があるとすれば、何か」を探っておられます。

内村は言います。「キリスト教は制度ではない、教会ではない、信仰簡条ではない、教義ではない、聖書でもない、キリストの言葉でもない、キリスト教は人である。活きたる人である。昨日も今日もいつまでもかわらないイエス・キリストである。」野村先生はこれを評して、「その生き方の中心には、このことばのように、活きているイエス・キリストその人が、歴史に中ではなしに、現に眼の前に立っていたのです。先生はその前に赤児のようにぬかずいていたのです」と言っておられます。

ひるがえってシユワイツァーもまた、「ガリラヤ湖のほとり」で漁師たちの前に立つた名もないイエスが、いまも私たちの前に名もない人として立ち、漁師たちに言ったとおなじように、われに従えという。そしてかれに従い行動した者だけに、イエスは彼が何ものであるかを、生涯を通して現すと申しました。先生はこれを受けて、「シユワイツァーの生涯は、外観が英雄的で、人間としての能力や、事業の大きさがあまりに目につき易いので、人はそのほうに心をうばわれ、イエスと対決しイエスを中心に動いている、かれの深いところにある魂の問題を見のがす。しかしここにかれをほんとうに理解するいとぐちがあると私は信じます」と言っておられます。

先生は二人の共通点をただこの一点に見出しておられたのです。そしてこのような二人の生き方の相似を「活けるキリスト・イエスとの霊的な、神秘的交わりの中にある」とし、その信仰の相似を「前向きの信仰」と呼ばれました。それは「右も左も、後ろも斜めも、上も下も向かないで、まっすぐに歩いていく単純な、幼児のような信仰」であると説明し、これこそが「生きた現実の、実存的な信仰」であるとされるのです。

先にも申しましたように、先生はご自分の信仰を直接に語ることに極めて慎重であられました。しかし先生は内村とシユワイツァーという敬愛する二人の師の信仰を十分に語って、実は巧まずしてご自分の信仰を告白しておられる、実に明確に告白しておられます。野村先生はこの二人と同様に、しかし全く単独に、ご自分もまた「キリスト・イエスとの神秘的な交わりの中に」、「前向きの信仰」をもって、九十五年の長い生涯を生きぬかれたのでした。

#### むすび

むすびとして、もう一度「内村先生と神秘主義」に戻って、一と言付け加えます。

先生はこの講演のむすびに「神秘主義をぬきにして信仰者の生活は語りえない」として、「パウロ、アウグスティン、アツシジのフランチェスコ、ドイツ神秘主義に連なる人々、ルーテル、敬虔派の創始者シュペーナール、パンヤン、フォックス、バツハ、近代に入ってヒルテイ、ベルジャールエフ、シユワイツァー」らを挙げ、「私はこの系列に内村先生をも加えんとするものであります」と、正に宣言しておられます。

当時この講演に対しては、「無教会」の中にかんがりの反対と批判があつたと聞きます。神秘主義に対する誤解は別として、恐らく、神秘主義は内村の「仰瞻の信仰」とは違ふとか、先生が挙げた系列の中には正統信仰とは言えない人々もいる、などという理由からだつたのでしょうか。しかし私はいまこの講演を再読してみても、先生の「宣言」にある種の預言的意味を感じないわけにはいきません。非力の私にはその説明はしたくてもできませんが、ただ直感的にそう思います。少なくとも先生の主張は、これからの「無教会」に無視できない示唆と影響を与えるのではないかと思われれます。

「前向き」とはいのちの法則であり、従って「前向きの信仰」とはいのちの道を活ける神に向かつて歩みつづけることであります。聖書に「彼は死すれども、信仰によりて今なお語る」とありますが、野村先生もまた亡くなられても、信仰によって今なお私どもの前を歩みつづけておられます。

(一九九六年十月二十日、シユワイツァー日本友の会主催による「野村実先生を偲ぶ会」で述べたもの。)